



昭和27年卒
山之内秀一郎氏

宇宙開発事業団理事長
朝陽同窓会新会長

同窓生

シリーズ ⑤1

劣等生を 経験して

私が都立第六中学校に入学したのは終戦後間もない昭和二十一年の春だった。戦災の影響で受験の競争率が最も高かったのは二中（現立川高校）そして次が六中だった。翌年、学制改革があり、新制高校が生まれたので、私たちが六中最後の学生となり、四年間最下級生のままだった。

授業は大変密度が高く充実していたと思う。学期末には通知表を書いたのだが、そこには自分の席次が書いてあった。いまでも手元に残っているが、一年生の一学期が三〇〇人中五一番、二学期が九九番、そして三学期はなんと二〇四番。ここまで落ちると授業には全くついてゆけない。授業中は、なんとか先生から指名されないように小さくなっていたし、期末試験が近づいても、どうしてよいかわからない状態だった。

原因ははつきりしている。その頃始まった野球に熱中して、勉強をしなかったから。全くといってよいほど娯楽の無かった戦争の時代が終わって、戦後復活したプロ野球に夢中になってしまった。野球雑誌と新聞を読み漁り、後樂園にも足を運んだ。それだけでなく、放課後には陽が暮れるまで校庭でバッティングに興じていた。

ある日、恐れていた父兄会が終わ

56年東京大学工学部を卒業し日本国有鉄道(株)に入社。

その後UIC（国際鉄道連合）の幹部職員としてパリに赴任。名古屋鉄道局運転部長。東東北鉄道管理部長として東北新幹線の開業に携わる。国鉄常務理事として民営化を推進。東日本旅客鉄道副社長・会長を経て'00年宇宙開発事業団理事長に就任。

著書に「ヨーロッパの鉄道四季暦」「鉄道と情報システム」「新幹線がなかったら」「なぜ起こる鉄道事故」など。

ると、母親が顔色を変えて帰ってきた。いきなり「秀一郎、座りなさい。お父さんがあんなに苦労しているのにこの成績はなんですか」当時、父は失業して、家族を養うために大阪の町工場の職工として働いて生活費を送金してくれていたのだった。そして母は、苦しい家計にもかかわらず、知人の教師を訪ね、一種の家庭教師として最も苦手な英語と国語を教えてくれるように頼んでくれた。こうなると勉強しないわけにはいかない。しかし、成績が落ちるのは簡単だが上げるのは難しい。なんとか中学を卒業する時には一一六番にまで回復できた。

当時の新宿高校の授業は大変レベルが高かった。二年生までにほぼ三年分のカリキュラムを終え、三年生は大学受験の準備のための特別授業が多かった。そして毎月、大学受験の模擬試験があり、上位の成績の者は名前と順位を壁に張り出していた。その頃には、なんとかこのグループに入れるようになっていた。

高校時代の懐かしい思い出として、全校マラソンがある。新宿高校は冬に、全員で井の頭公園から浜田山往復十キロのマラソンが伝統の行事だった。一ヶ月ぐらい前から体育の時間は全てマラソンの練習になる。代々木駅往復から始まり、徐々に走る距離を増やしていく。最初のうち翌日は足が張って階段を上がれないほどつらかったが、いよいよ本番になって、女性の下級生の応援を受けて完走した時の気分はなんとも言えなかった。

